

プール冷えています！

【梗概】

深沢敏明(49)は、かつて大手広告代理店の花形職についていたが、広告のデジタル化についていけず、今は小さい商社でルート営業をしている。広告クリエイティブにやりがいを持っていた頃とは違い、ただ生活のための仕事をする日々だった。大学生の娘・まりな(20)との関係は良好だが、元妻の有希(46)とは離婚している。

深沢は電話を取るように新入社員の杉本颯太(22)に注意したことで、パワハラ認定で謹慎させられてしまう。深沢、藤原晃司(50)、真鍋アツシ(47)の三人は、広告会社時代に「としまえんみたいな広告を作ろう」を合言葉にチームを組んでいた。「としまえん閉園」のニュースが報道され、としまえんに足を運んだ深沢と藤原は真鍋に再会する。

おじさんはカーストの最下層、おじさんフィルターにかけられてセンスがないと決め付けられると主張する藤原に、深沢も真鍋も否

定できない。深沢たちは35才以下しか応募できない広告コンクールに、まりなの名前で応募するが予選も通らずに敗退してしまう。

有希は深沢に再婚すると告げる。深沢は大手勤務のステイタスがなくなったことで有希とうまくいかなくなったと思いついていたが、再婚相手は決してエリートではない素朴な男性だという。

深沢のもとに電話が嫌でパワハラを訴えた杉本から電話がくる。杉本の今の勤務先のIT企業で中高年男性向けのウェブメディアを運営しているが記事の質が低いため、深沢たちに制作して欲しいと依頼する。

深沢、藤原、真鍋でリニューアルしたメディアは好評を得て、杉本の会社は東証マザーズ上場を果たした。

閉園となったとしまえんに立ち寄った深沢はプールだけは残すという署名運動にサインをする。署名とともに「永遠にプール冷えます」 という広告のコピーを添えて。

人物

深沢敏明(49)(23) 営業マネージャー

藤原晃司(50)(24) 広告ディレクター

真鍋アツシ(47)(21) フリーデザイナー

深沢まりな(20) 大学生／深沢の娘

深沢有希(46) 深沢の元妻／まりなの母

杉本颯太(22) 会社員

山口ハルト(32) ITベンチャー社長

松坂美子(46) コンプライアンス室長

○商社・営業部オフィス(朝)

同じへアケア商材のポスターが、壁にいくつも貼られている。

ポスターは商品のクローズアップ写真に無骨なフォントで、大きく商品名と価格が書かれていてセンスがない。

深沢敏明(49) 杉本颯太(22)を含む社員がいる。

杉本以外は全員、忙しそうにパソコン作業や電話応対をしている。

一人だけ何もせず、机にじっと座っている杉本。

電話が鳴るが杉本は取らず、隣の席の女子社員が受電する。

深沢が丁寧な口調で杉本に注意する。

深沢「杉本くん、慣れないうちは電話が怖いかもしれないけど、早く電話に出てクライアントを覚えなさいといつまでも営業に出られないよ」

杉本、うつむいて返事をしない。

○広告会社・ミーティングスペース

開放的な空間に、今風のおしゃれなインテリアが配置された室内。

藤原晃司(50)が若い部下の男女数人と打ち合わせをしている。

藤原、スマホ画面で昔の広告の画像を見せながら

藤原「えーっ、今の若い子は、としまえんの
告知知らないんだな。あの居酒屋のビール
冷えてます的なポスターで、プール冷えて
ますってシズル感が秀逸で。こういう良質
な広告が今はないよねー」

藤原はノリノリで楽しそうだが、部下
たちはうんざりした表情。

○商社・営業部オフィス(夕)

営業から戻った深沢が、室内に入っ
てくる。

事務員「深沢さん、総務のコンプライアンス

室に行ってください」

深沢「俺？ どうして？」

事務員「わからないです。総務の松坂さん、
すごい剣幕でした。早く行ったほうがいい
ですよ」

深沢、怪訝な表情。

○同・小会議室(夕)

深沢の向かいに松坂美子(46)が座って
いる。

美子「今の新入社員は電話に慣れていないん
です。知らない人からの電話に出ると強要
するのは暴力と同じなんですよ」

深沢「ネット注文が増えてきたとはいえ、ま
だ電話受注も少なくないですから、電話取
らないと始まらないですよ」

美子「電話を取る業務は事前に知らされてい
なかったと杉本さんの親御さんからクレー
ムがきています」

深沢「営業職にはクライアントとのコミュニ

ケーションが当然付帯します。いちいち事前にそこまで・・・」

美子「とにかくあなたの指導は時代に合わない恫喝でパワハラにあたります」

ドンと机を叩く美子。

深沢、きよとんとして、二の句が告げずにいる。

○同・廊下

壁の掲示板に「第一営業部 マネージ

ャー 深沢敏明 無期限停職」と大きく

く貼られている。

社員たちがヒソヒソと噂話をしているが、深沢が通ると急に静かになる。

深沢は杉本と目が合うが、目をそらして去っていく杉本。

深沢のスマホの着信が鳴る。

○同・非常階段

スマホで話している深沢。

深沢「養育費はまりなが二十歳になるまでつて決まっただろ。先月まりなの二十歳の誕生日だったじゃないか。学費はまりなが卒業するまで払うし、それは父親としての義務だからさ。それと別に養育費もつてのは・・・」

スマホからヒステリックな叫び声。
耳を抑える深沢。

深沢「わかったよ。別で養育費も払うよ。まりなが結婚して家出るまで・・・か」

深沢、電話を切つてため息をつく。

○深沢の自宅・リビング(夜)

深沢と深沢まりな(20)が話している。

テレビのニュース番組では、ハラスメントの特集。

テレビ内のコメンテーター「だから40代50

代のおじさん世代が昭和の根性論で若い世

代に価値観を押し付ける老害そのもの

で三年以内の離職率が・・・」

まりな、ケーキを頬張りながら

まりな「それママがおかしいじゃん。感情的で理屈が通じないんだもん。疲れちゃう」

深沢「母親のことをそんな風に言うもんじゃないよ」

まりな「私、ここでパパと暮らしちゃいけないかな」

深沢「俺が良くても、ママが納得するわけないだろ」

まりな「養育費もらえなくなっちゃうもんね。でも、こっちのが大学も近いし。最近、ママが就活にも口出してくるからほんと疲れる」

深沢「ほとんど社会経験がないママが、一体何の口出してくるんだ？」

まりな「私はキャリアを積める仕事したいのに、ママは専業主婦が勝ち組だからエリートと出会える職場にしなさいって。いつの時代の話？ ママの年代にしても言うこと古いよね」

深沢「・・・コメントしづらいな」

テレビがニュースに切り替わる。

アナウンサー「人々に94年間愛され続けた

東京都練馬区の遊園地・としまえんの閉園
が決定しました」

深沢「としまえんが・・・閉園」

深沢、テレビ画面を見て絶句する。

深沢のスマホに着信。

「藤原晃司」と表示されている。

電話を取ると、スマホから藤原の声。

藤原の声「おい。としまえん閉園だって。そ
れより俺、会社クビになっちゃった」

電話の向こうで藤原が嘆いている。

○としまえん・エントランス

「としまえん」と書かれた案内板。

○同・園内

親子連れやカップルで賑わっている園
内。

神妙な面持ちでウォーター 슬라이ダー
の前に佇む深沢と藤原。

深沢「プール冷えてます、か」

藤原「史上最低の遊園地、つてのもあったよ
な」

深沢「あったぞ。エイプリル・フールの。あ
れ凄かったな。広告がアイデア勝負なんて
概念なかった」

藤原「すごいのはさ、プール冷えてます、な
んて俺らが高校生の頃の広告だろ。それが
社会に出ても、まだみんなとしまえん、と
しまえんって言ってたんだよな」

深沢「電博堂の内定もらって、広告やれるっ
て決まった時はあんなに嬉しかったのに。
まさかおっさんになる頃には、広告が嫌い
になってるとは想像もつかなかった」

藤原「深沢、お前広告嫌いなのか」

深沢「あ、嫌いまで言うて語弊があるか。興
味がない、が近いかも。今の会社にさ、商
品名と価格しか書いてないドーンとしたポ

スターが壁に何枚も貼ってあるんだけどさ。
何とも思わない」

藤原「昔のお前なら考えられないな」

深沢「以前の俺なら、生理的に我慢できなかつたと思う」

真鍋アツシ(47)が歩いてきて、スライダーの前に立ち止まる。

深沢、真鍋をじつと見ると思い出したように声をかける。

深沢「もしかして・・・デザイナーの真鍋？

ほら、俺たち電博堂で」

真鍋、深沢と藤原を指しながら

真鍋「えっ、えっ、深沢さん？ まさか藤原さん？」

藤原、真鍋の肩を抱いて

藤原「えーっ、真鍋か！ 可愛い顔してたのに渋いおっさんになっちゃって」

深沢「お前が言うなよ。懐かしいなー、何年ぶりだろう」

真鍋「20年以上は経ちますね。もったかな」

○電博堂・クリエイティブ室(夜) (回想)

広い空間に、深沢敏明(23) 藤原晃司

(24) 真鍋アツシ(21) しかいない。

三人は真剣な表情で打ち合わせをしている。

机の上には広告のラフスケッチが散

乱している。

深沢「いい案がでないな」

真鍋「悪くはないですが、12社コンペを勝

ち抜くには弱いですね」

藤原「こんなんじゃ、としまえん広告の足元にも及ばない」

真鍋「僕、朝までにサムネイル10案描きま
すよ」

藤原「俺はキャッチコピー百本書く」

深沢「俺は企画書練り直す。としまえん超える
る広告を作ろう」

三人で円陣を組んで手をかざす。

○としまえん・園内

ウォータースライダーを滑る子供たち
を眺める深沢、藤原、真鍋。

深沢「ただ、いいモノ作りたいって。ネット
もない時代に必死だったな」

真鍋「結局、としまえんみたいな広告、作れ
ませんでしたね」

深沢「真鍋は今、何やってるの？」

真鍋「独立して細々とデザイン事務所やって
ます。一時は20人くらいスタッフいたん
ですけどね。今は僕一人で外注使って何と
か。深沢さんたちは？」

深沢「俺はネット広告主流になるとついてい
けなくて、全然畑違いのルート営業やって
るよ・・・それももう辞めるかな」

真鍋「深沢さんが広告から離れるなんて意外
でした。藤原さんは？」

藤原、嘆きながら

藤原「真鍋、聞いてくれよー」

○同・走る乗り物の上

機関車タイプのゆったり進む子供用ア
トラクションに足を曲げて乗っている

深沢、藤原、真鍋。

子供たちがジロジロ見ている。

藤原「セクハラって言ったってさ、話しやす
い女の子は名前のちゃん付け、ちよつと距
離がある女子社員には名字のさん付けで呼
んだのが原因。それで解雇なんてあんまり
じゃないか？」

深沢「まあ、このご時世よくはないけど、さ
すがに解雇は不当だと思う。出るとこ出た
ら勝てるかもしれないぞ」

藤原「いや、深沢は甘い。世間をわかってな
い。女性や若者は守られるけど、叩かれた
おじさんがひっそり自殺したって、誰も気
に留めない。おじさんはカースト最下層な
んだよ」

真鍋、重い口を開いて

真鍋「すみません。僕、同意できません」

深沢、藤原、驚く。

真鍋「今の価値観や若い世代と共存できないのは、年齢関係なくビジネスに向いていないですよ。そういうのが老害と言われて、同世代の足を引っ張っているんです」

アトラクションが止まる。

真鍋「女子社員の呼び方は一つのきっかけで、他にも要因があつたんじゃないですか」

真鍋、そのままアトラクションを降りて立ち去って行く。

深沢と藤原は乗ったまま。

藤原「真鍋は・・・俺たちのこと慕ってくれてたよな」

深沢「昔のことだよ。あいつもデザイン学校出たばかりだったから」

藤原「若い奴らに言われるより、きついな」

深沢、藤原の肩をポンと叩き、アトラクションを降りる。

○深沢の自宅・リビング(夜)

雑誌を見てくつろいでいる深沢。

ノートパソコンを広げて、勉強しているまりな。

深沢「勉強なら向こうの家でやれよ」

まりな「ここだって元は私の家でしょ。なんで可愛い娘が来るのを嫌がるわけ？」

深沢「嫌がってないけどさ。ママが怒って来なきゃいいけど」

まりな、パソコン画面を覗きながら

まりな「パパ、ADM賞って知ってる？」

深沢「有名な広告賞だよ。俺たちが若い頃から憧れてた。ADM賞が人生の目標みたいなものだった」

まりな「それに受賞したら、広告クリエイティブ論の単位もらえるんだって」

深沢「そんなわけないだろ。大学生が簡単に取れるようなものじゃない」

まりな「これ見てよ」

深沢、パソコン画面を覗き込む。

深沢「えっ、最近の受賞者はフリーターや学

生ばかりなのか。随分変わったな。若い感性を求めするため、応募条件が35才以下？

これほんとにADM賞か？」

まりな「パパ、電博堂にいたプロでしょ。まりなが応募するから手伝ってよ。広告クリエイティブ論、必修なのに去年も落としたしやっかし」

深沢「親が手伝うって、夏休みの宿題じゃあるまいし・・・」

○オープンカフェ

テラス席でランチを食べている深沢、

藤原、真鍋。

藤原、スマホを見ながら、

藤原「ADM賞も権威が落ちたもんだな」

深沢「最優秀の広告が、全国の繁華街や駅で展開されるのは変わってないけどな」

藤原「まりなちゃんがそう言ってるなら、俺たちで応募しないか？」

深沢「俺は夏休みの宿題レベルにはサポート

するけど、なんでお前まで・・・」

藤原「俺はクリエイティブの現場で、おじさんフィルターにかけられて、ずっとセンスがない、古い、ダサいと小馬鹿にされてきた」

真鍋「藤原さん、そんなこと言われてたんですか」

藤原「口には出さなくても、そんな感じであしらわれてきたんだよ。だから、可愛い女子大生の名前でエントリーするんだよ。おじさんフィルターのない世界で、俺らのクリエイティブが通用するのか勝負したい」

深沢「手伝ってくれば、まりなは喜ぶだろうけど」

藤原「な。みんなハッピー。ウインウインウインだ」

真鍋「・・・そういうフレーズが古いとかダメとか言われるんですよ。無理に若者と張り合うおじさんほど痛いものはないです

よ。一緒にいるとネガティブな愚痴が移り
そうです」

藤原、しゅんとして下を向く。

深沢「真鍋、言い過ぎだろ」

真鍋「藤原さん、いつからそんな風になっち
やっただんですか？ こういう50代になり
たいって思えるような、もつとかつこいい
存在でいてくださいよ」

真鍋、紙幣をテーブルに置いて店を出
ていく。

深沢、藤原に

深沢「A D M賞、俺たちだけでもやろう」

○真鍋のデザイン事務所・室内

シンプルでセンスは良いがこじんまり
した事務所。

本棚は古今東西のデザイン関連本で埋
め尽くされている。

事務所内には真鍋しかない。

真鍋はパソコンに向かって、外注クリ

ライターとチャットをしている。

パソコン画面には、クオリティの低いデザインカンパらしき画像が表示されている。

激しくキーボードを打ちながら、チャットツールにメッセージを入力している真鍋。

真鍋の声「これではワイヤーフレームに色ついただけですよ。検収できないので再度提出お願いします」

チャットの通知音。

画面を見る真鍋。

外注の声「具体的に修正内容を言ってくれないとわかりません」

キーボードで返信を打つ真鍋。

真鍋の声「デザインをお願いしたはずですよ。これではトレースしただけのオペレーターの作業ですよ」

外注の声「要件にありませんでした。増額してもらえないと無理です」

真鍋の声「頂いたものはデザインになっていませんよ。オーダー通りになっていないのに増額はあり得ません」

外注の声「そんなの横暴です。下請法で訴えます」

真鍋、ため息をついて、オンライン会議のツールを開く。

パソコン画面に発注者の映像が現れる。

発注者は20代の男性でいかにもな六

本木IT族の風貌。

発注者「お疲れです。納品まだかかりますかね？」

真鍋「申し訳ありません。外注のトラブルで今晩中には・・・」

発注者、ため息をついて、チツチツと指を鳴らしながら

発注者「今回に限らず、真鍋さん、納品遅いっすよね。今はググれば無料のテンプレが転がってるんだから、デザインなんか誰でもできるじゃないすか。クリエイティブな

んでどうでも良くて、P VとC Vさえ上がればいいんすよ。どうせU I / U Xのコンサルが直し入れるための叩きだから、変にこだわらなくていいんで、さつさと適当に出して欲しいんすよね」

真鍋、話の途中で会議ツールから退室する。

パソコン画面から、発注者の映像が消える。

○深沢の自宅・リビング(夜)

資料をテーブルに広げて、深沢、藤原、まりなが話し合っている。

深沢「社会的なメッセージを広告にする、がお題か」

藤原「ビルとか虫除けとか、遊園地とかプールを売り込むんじゃないんだな」

深沢「こればかりは若者にマーケティングリサーチしないと」

まりな「大学で友達に聞いてくるよ」

深沢「今からアンケート項目作るから頼む」

インターフォンの音が鳴る。

まりながモニターに駆け寄って応対している。

まりな「パパ、真鍋さんって知ってる？

パパの昔の後輩だって」

深沢と藤原、顔を見合わせる。

× × ×

深沢、藤原、真鍋が対面でソファに座っている。

真鍋「藤原さん、この前は失礼なこと言っ
すみませんでした」

藤原「いや、お前の言う通りだよ。若い頃さ、
過去にしがみついている上司を見ると、ああ
いうおっさんにはなりたくねーって思っ
たけど、自分がその通りになってたな。言
われて目が覚めたよ」

真鍋、首を振って

真鍋「ムシのいいお願いですが・・・A D

M賞、僕も一緒にやらせていただけませ
んか？」

深沢、藤原、驚く。

深沢「一緒にやってくれるなら嬉しいけど、
急にどうした？」

真鍋「また藤原さんと深沢さんと、昔みたい
に三人で面白い仕事したくなっただんです。

僕、偉そうに言っていましたけど、今の価値
観に合わせるって限界ありますね」

藤原「よくわからんけど、やるか。昔みたい
に」

藤原、笑顔で真鍋の肩を組む。

× × ×

テーブルの上に資料と本。

缶ビールの空き缶がある。

深沢「テーマは、本当にハラメント・ハラ
メントでいいんだろうか」

藤原「ハラスメント・ハラスメント。略してハラハラ。社会性のあるテーマなら、今これしかなくね？」

真鍋「なんですか？ ハラハラって」

藤原「マナーが悪かったり、粗暴な奴は世代関係なくいるだろ。なのに何故か中高年の男に限定して、メディアは老害とかき立てる。世代で区切りたがって中年のおじさんを標的にする。気に入らないことを、セクハラだ。パワハラだとかじつけて嫌がらせするのがハラハラだよ」

真鍋「そんなおじさんの主張、まりなちゃんの名前でエントリーしたらおかしいじゃないですか。バレバレです」

× × ×

テーブルの上に、広告案のラフスケ

ッチが山積みになっている。

深沢「いい案でないな」

真鍋「若者に受けるには弱いですね」

藤原「おっさんの発想の域を出ない」

真鍋「僕、朝までにサムネイル10案描きま
すよ」

藤原「俺はキャッチコピー百本書く」

深沢「俺はプレゼンボード・・・なんか、こ
の会話、覚えあるな」

真鍋「何度も似たようなセリフ言ってた気が
します」

藤原「入社して最初の研修のワークショップ
のお題覚えてるか？」

深沢「南極探検乗組員募集だろ」

藤原「求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極
寒。暗黒の続く日々。絶えざる危険。生還
の保証なし。ただし、成功の暁には名誉と
称讃を得る」

真鍋「世界最古の求人広告ですよ。藤原さ
んがMVP取ったから覚えてます」

深沢「あれは藤原にパクられたんだよな。俺
が『マイナス20度かあ。悩みも凍るだろ

うなあ』って言ったたら、こいつそのままキヤッチコピーにしたんだぜ。それでMV Pって」

藤原「もらった賞金はちゃんと二人で飲んだからいいじゃんか。俺はナチュラルボーンライター。いいフレーズには敏感なんだよ。自分のであれ、人のであれ」

真鍋「ナチュラルボーンとか・・・リズムが古い」

深沢、考え込んで閃いたように

深沢「・・・ネガティブな話の最後に『賞賛を得る』並みのメッセージがあれば、ハラハラテーマでも行けるな」

藤原「キヤッチコピー二百本書く。世の中にハラハラを訴えるためなら」

三人とも各々、ノートパソコンに向かう。

○撮影スタジオ内

真鍋が本格的な撮影機材で、女子大生

と見られる美人モデルを撮影している。
撮影の様子を見ている深沢、藤原、ま
りな。

まりな「まりなの友達、可愛いでしょ。読モ
やってるんだよ」

ファインダーを覗いてシャッターを
切る真鍋。

真鍋は撮影データを確認すると、ま
りなの方を見ている。

真鍋「まりなちゃん」

まりな「はい」

真鍋「入って。モデル二人のバリエーション
も撮ろう」

まりな「ええっ。私、モデルじゃないし、お
かしいよー」

深沢と藤原がまりなを促す。

まりなとモデルのツーショットを撮影
している真鍋。

自然な表情になっていくまりな。

撮影のシャッター音が響いている。

○ポスターのアップ

まりなとモデルの幻想的なツーショット写真。

「世代の河に橋をかけよう」というキヤッチコピー。

○スクランブル交差点

行き交う人々。

ファッションビルに、大きな広告が掲げられている。

掲げられた広告はエキセントリックで一般的に理解しづらいビジュアルとキヤッチコピー。

巨大な広告を眺めている深沢、藤原、真鍋、まりな。

深沢「予選も通らなかったな」

藤原「おじさんフィルターじゃなくて、俺らナチュラルにセンスなかったんだな」

真鍋、巨大な広告を指さして

真鍋「負け惜しみ以前に・・・本当にあれの良さが理解できない」

まりな「ごめんね。私が図々しく映っちゃったから。もっと美人な子なら」

真鍋「そんなこと全然ないよ」

藤原「まりなちゃんは可愛いのに、おじさんたちがダサいばかりに」

深沢、まりなに向き合って

深沢「・・・まりな。単位取ってやれなくてごめん」

深沢、背を向けて交差点を渡って行ってしまふ。

藤原「え、どうした？」

真鍋「さあ」

首を傾げている藤原と真鍋。

深沢の後ろ姿を心配そうに見ているまりな。

○としまえん・エントランス

「94年ありがとう　としまえん　本日

閉園」の看板。

○同・園内

家族連れやカップル、シニア夫婦などで賑わっている園内。

ベンチに並んで座る深沢と、深沢有希

(46)。

深沢と有希は、紙コップのコーヒーを飲んでいる。

深沢「珍しいな。わざわざ会って話そうなんて」

有希「そう？ あなたが最後にとしまえん来たいかと思って」

深沢「何か話があるんだろ」

有希「私、結婚するの」

深沢「おめでどう。・・・まりなはどうするんだ」

有希「あなたと住みたいって。だから、まりなをよろしく」

深沢「ふぎけんな」

有希「まりなの意思を尊重しただけ。もう

二十歳で大人なんだし。あ、養育費はもう

いいから」

深沢「当たり前だ」

有希「まりなだっただけあなたに懐いてるし、可愛がってたでしょ。時々会ってること知ってる」

深沢「そういう問題じゃない。まりなの気持ちを考える。母親が男と幸せになるために都合よく捨てられるんだぞ」

有希、ため息をついて、

有希「相変わらず目先のことしか考えられないのね」

深沢、仏頂面で紙コップのコーヒーを飲み干す。

有希「あと五年もすれば、まりなだっただけでできて自分の家庭を持つかもしれない。その時に私が足を引っ張ると、子供に依存しない私の人生を生きるのと、どっちがまりなのためだと思う？」

深沢「足を引つ張らない優雅な人生か。今度の男は裕福なエリートなんだろうな。デジタル化についていけなくて、大手広告会社を追われた情けない男と違って」

有希「あのさ・・・50近くなったら誰だって理想の自分と違ってることの一つや二つや三つあるでしょ。私だって夢あったんだから」

深沢「・・・知ってる」

有希「それでもみんな、今ある環境で自分なりの幸せ見つけて生きてくんじゃないの。こんなはずじゃなかった、昔はよかったって、いつまでも過去にしがみついても意味なくない？」

深沢、空の紙コップを手で握り潰す。

深沢「・・・時々はまりなに会ってやってくれ」

有希「当たり前でしょ。母親だもの」

深沢、ゴミ箱に紙コップを捨てて、歩き出す。

有希「待って」

深沢、振り返る。

有希「結婚する人。整体院に勤めてるの。高卒だからエリートとは違うわね」

深沢「・・・いい人そうだな」

有希「元野球少年だけどね。肩壊して野球できなくなっちゃったから、整体師になったんだって。整体でサポートして、アスリートの夢叶えるのが夢って言ってる」

深沢「相変わらず、仕事に一生懸命な男に弱いんだな」

有希「まりなも似てるから気をつけさせなさい。男は経済力で選びなさいって厳しく言ってるの」

深沢と有希、笑い合う。

小さい子供を連れて、笑顔の若い夫婦が通りかかる。

○深沢の自宅・書斎(夜)

古い広告の本で埋め尽くされた大きな

本棚がある。

深沢は本の間から取り出した一枚の写真をじっと眺めている。

深沢、有希とまだ小さいまりなが三人で映っている写真。

パジャマ姿のまりなが入ってくる。

深沢「・・・まだ起きてたのか」

まりな「眠れないよ。小さい頃はこの家でスヤスヤ寝てたのに」

深沢「これからお前の家なんだから」

まりな「ねえ、パパとママ、どうして別れたの？」

深沢「・・・どうしてだろうな」

まりな「ママ、パパのこと嫌いじゃなかったと思う。ううん。本当はママの方がパパを好きだったよ」

深沢「だからこそ、ガツカリして嫌いになっただよ」

まりな「パパが仕事変わったから？」

深沢「大手の広告会社の花形部署から、小さ

い商社のルート営業。ステイタスも失墜して夢もやりがいもなく、ただ生活のために働く。そんな男は魅力ないだろうな。ママじゃなくても愛想尽かすよ」

まりな「その何がいけないの？ ちゃんと真っ当に生きてくって立派だと思う」

深沢「・・・明日、一限あるだろ。もう遅いから寝なさい」

まりな、涙ぐんで

まりな「もう元には戻れないと思うけど、ママの本当の気持ち・・・もう少しわかってあげて。ママはステイタスとか、そんな人じゃないから」

まりな、部屋を出ていく。

深沢、重い表情で考え込んでいる。

○電博堂・給湯室(夜) (回想)

大きな携帯電話を持って会話している

深沢敏明(23)。

深沢「だから仕事だってば。急にクライアン

トがさ・・・」

ガチャンと電話が取れる音。

ツーツーと音が鳴っている。

○同・クリエイティブ室(夜) (回想)

室内には有希(20)しかいない。

有希はスケッチブックを広げて、小さいサイズのデザイン案をいくつも描いている。

大きな携帯電話を持って、戻ってくる

深沢。

深沢「あれっ、有希ちゃん、まだいたの？」

有希「深沢さんこそ、まだいたんですね」

深沢「クライアントとトラブルっちゃったから後処理しないと。有希ちゃんは他の女の子みたいに合コンとか映画の試写会行かないの？ タクチケも試写会券もこんなにあるよ」

深沢、タクシーチケットと映画の試

写会の券の束を手取る。

有希「明日までにサムネイル20案作らなき

や」

深沢「頑張るね」

有希「私、一般職だから。総合職の子の10

倍頑張っても、お茶入れてとかすぐ言われるの」

深沢「頑張ってるの、見る人は見てるよ」

有希「そうかな。私がデザイナーになりたいなんて笑わない？」

深沢「笑わない」

有希「深沢さん、トラブル処理、手伝いまし

ょうか」

深沢「サムネイル作らなきゃいけないだろ」

有希「家でもできるから」

○繁華街(夜) (回想)

並んで歩いている深沢と有希。

深沢「ありがとう。有希ちゃんのおかげで半

分の時間で終わったよ」

有希「今度ラーメン奢ってくださいね」

深沢「ラーメンでいいの？ もっとおいしい
いもの奢るよ」

有希「彼女さんに悪いもん。ラーメンならい
いかな。深沢さん、毎日遅いけど、ちゃん
とデートとかできてますか？」

リエが二人の目の前に現れる。

リエ「誰よ、その女!!」

深沢「リエ、なんでここに？」

リエ「仕事なんて嘘ばかりついて」

深沢「落ち着けて」

リエ「こんな子供っぽい女と・・・許せない」

リエ、有希にバッグをぶつける。

バッグが有希の顔に当たる。

有希「いたっ」

有希、しゃがみ込んでしまう。

深沢「お前、何すんだよ」

深沢、有希を抱き起こして、

深沢「有希ちゃん、大丈夫？ ごめんね」

リエ、バッグを拾って立ち去っていく。

○深沢の自宅・書斎(夜)

神妙に考え込んでいる深沢。

スマホの着信音が鳴る。

知らない番号が表示されている。

深沢、怪訝そうに受電する。

深沢「はい、深沢です」

杉本の声「ふ、深沢さん。遅い時間にすみません。ご無沙汰してます。杉本です」

深沢「え、杉本くん！ どうしたの？ 電話、平気なのか」

杉本の声「その節は、申し訳ありませんでした。あの時は本当に電話が怖くて。今なら深沢さんが教えてくれたこと、社会人として当たり前だっってわかります」

深沢「杉本くん・・・随分変わったね。一体、どうしたの？」

杉本の声「会社に連絡したら、深沢さんも有給消化したら、退職されるって聞いて驚いて・・・」

深沢「え？ 君も？」

杉本の声「はい。僕も何となくいづらくなつて退職しました。あ、僕は自業自得ですけれど。今はITベンチャー企業に転職します。それで、深沢さんに相談があつて……。僕の今の上司に会ってもらえませんか」

深沢、きよとんとした表情。

○IT企業・商談ルーム

ガラス貼りの開放的なオフィス。

エッジの効いたデザインの壁紙や、

個性的な家具のある室内。

深沢、杉本と山口ハルト(32)がいる。

深沢は山口に渡された名刺を見る。

名刺らしくない変わった形の紙片に

「代表取締役社長・山口ハルト」と書か

れている。

深沢「こんな立派な最先端のIT企業の若

手社長に、私がお役に立てることはなさそ

うですが……」

山口が手元のポインターを操作するとスクリーンにスライドが映し出される。派手なデザインのウェブメディアのトップページが表示される。

山口「知的層の中高年男性をターゲットとしたウェブメディアです。資金調達を受けてローンチしました」

深沢「ターゲットは中高年男性なんですね。ぱつと見る限り、もう少し落ち着いたデザインの方がいいかと」

山口「そうですね。僕たちが得意とするSEOマーケティングで、高い流入とページビュー数を誇っているんですが・・・」

杉本「肝心の記事内容やデザインのレベルが低いとクライアントに指摘を受けていて、最初の流入は数値が高いんですが、すぐに離脱されてリピーター読者もほとんどいないんです」

深沢、スクリーンをじっと見て頷いている。

山口「ターゲットである大人のインテリ男性が離れているんでしょうね。死活問題です。このメディアのクオリティを上げるのが私たちの急務なんです。それで杉本から前の上司の深沢さんが、ターゲットのご年代。しかも電博堂のご出身でクリエイティブに詳しいとうかがいまして・・・」

深沢「はあ。ですが、私がクリエイティブ畑にいた時は、まだグラフィックがメインだったので、お恥ずかしながらウェブはほとんど知見がないんです」

山口「いえ数値やデジタルのことは僕たちが責任を持ちます。深沢さんには、ターゲットとなる大人の男性に見応えがあるメディアへと記事やデザインの質を上げて欲しいんです。資金も潤沢ですので、やりがいもあると思います。ぜひ一緒にやっていただけませんか」

山口と杉本、頭を下げる。

○真鍋のデザイン事務所・室内

深沢、藤原、真鍋が話している。

深沢「表に名前も出ないし、決して派手な役割じゃないかもしれないけど、俺はやってみたい」

藤原「・・・面白そうじゃねーか」

真鍋「必要としてもらえるなら、全力でやりましょう」

三人、円陣で手を重ねる。

× × ×

ノートパソコンを覗き込んでいる深沢、藤原、真鍋。

画面には、ウェブメディアのトップページが表示されている。

藤原、記事の画面をスクロールしながら、

藤原「こりゃ、ひどいな」

真鍋「これ本当にプロのライターが書いてる

んですか？」

深沢「ウェブライターとか・・・特にS E

Oに特化したライターは、検索に有利な

キーワードで記事を量産することに意義があつて。どうやら俺たちの価値観で言ういい記事、いいライターとはちとと違うつばい」

藤原「マジか・・・俺にこういう文章、真似できないぞ」

深沢「質のいい記事にして欲しいって依頼だから真似しなくていいよ」

藤原「よかった」

記事を読んでいた真鍋が顔を上げて言う。

真鍋「これ文章もひどいですが、そもそもテーマが中高年を不快にさせてますよね。だって、A G AとかE Dとかメタボとか離婚とか、そんなのばっかですよ。人に薦める気にならないです」

深沢「・・・確かに離婚は、俺も一時期相当

検索したけどな」

藤原「直面してる人は、ひっそり検索するんだろうけど」

深沢「アフィリエイト収入見込むと、コンプレックス商材を中心に切り上げがちなんだろうな」

真鍋「でもそれじゃ、口コミで薦めたくなくなる魅力的なメディアにはなりませんよ。深沢さん、離婚の記事読んだ後、そのページに薦めたくなくなりましたか？」

深沢「んなわけねーだろ。そうか。大人の男が勧めたくなる。読んで満たされる。ビジネス、教養、美容、こだわりのアイテム、映画、歴史、グルメ、旅・・・みたいな方向に舵を切るか」

藤原、真鍋がOKサインのアクション。

× × ×

真鍋はパソコンに向かってデザインワーク。

藤原はキーボードを打って、原稿を執筆。

深沢はプリントアウトしたゲラに赤入れしている。

× × ×

パソコン画面を見ている深沢、藤原、真鍋。

新しくなったウェブメディアをスクロールしながら、満足そうに見ている。

○ I T 企業・プレゼンルーム

大きなスクリーンがあるプレゼンルーム。

スクリーンには落ち着いたデザインのウェブメディアのトップページが映し

出されている。

深沢が壇上でプレゼンしている。

山口、杉本、出資者たちが頷きながら聞いている。

深沢のプレゼンが終わり、お辞儀をすると出資者たちから拍手とスタンディングオベーション。

○東京証券取引所・上場セレモニー会場

ディスプレイパネルに、緑や赤の電飾数字が動いている。

壇上の背面には「祝・上場」と書かれたパネル。

その前で、マスクをした山口、杉本を含む若い役員たちが一斉に鐘を鳴らしている。

撮影する報道陣やスタッフも全員マスクをしている。

○深沢の自宅・リビング(夜)

テレビ画面には、上場セレモニーで鐘を鳴らす笑顔の山口、杉本たちが映っている。

テロップには「東証マザーズ上場」と書かれている。

画面を見ながら、喜んでいる深沢とまりな。

パソコン画面に表示されたオンライン会議ツールには、藤原、真鍋、深沢とまりなのいるリビングがそれぞれの画面で映っている。

パソコンの音声から藤原と真鍋の声を
する。

藤原の声「上場だな」

真鍋の声「上場ですね」

深沢「こういうの、嬉しいな」

藤原の声「カンバイ」

藤原、真鍋は、各々缶ビールで乾杯している。

深沢とまりなも、ワイングラスで乾杯

する。

○美容院・店内

鏡の前でケープをして座っているマスクの深沢。

隣に座る老紳士のマスクをしていて、タブレットでウェブメディアを見ている。

その様子を覗き込む深沢。

老紳士、深沢の視線に気づき、

老紳士「この記事ページいいんですよ。おすすめです。前は内容薄かったんですけどね。今はネットの読み物も本に負けてないですよ」

深沢「ありがとうございます」

老紳士「このコラムで男も美容院に行こうと特集してみましたね。私たち世代は男が美容院なんてね」

深沢、満足そうに微笑む。

老紳士「色々聞かれたら何て答えたらいいか

心配じゃないですか。中高年に寄り添って、
そんな時の答え方も書いてあるんですよ、
この記事」

美容師が深沢の後ろに立つ。

美容師「本日はどのようでしたでしょうか」

深沢、鏡ごしに

深沢「流行ってるヘアスタイルにしてください」

老紳士「読んでたんですね」

深沢、老紳士に会釈する。

○としまえん・跡地

柵で囲まれたとしまえんの跡地。

「94年間のご愛顧ありがとうございます
した としまえん」という看板がある。
行き交う人々は全員マスクをしている。
若々しいヘアスタイルになった深沢が
通りかかる。

深沢のスマホのメッセージの通知音が
鳴る。

懐からスマホを取り出す深沢。

画面を見ると、ウェディングドレスを着た有希とタキシードの男性が映っている写真。

男性は小太りで眼鏡をかけた優しそうな風貌。

深沢は「おめでとう」と返信。

追伸で「真っ当に生きるのも悪くない」と送る。

有希からの返信でハートのスタンプが届く。

深沢の顔がほころぶ。

としまえんの跡地を感慨深く眺めている深沢。

地元の人らしき女性が、深沢に声をかける。

女性「あの・・・今、としまえんのプールを残す署名運動をしています。よろしければ、ご協力いただけませんか」

深沢「はい。もちろんです」

深沢、備え付けの消毒スプレーを手に
吹きかけてペンを持つ。

署名帳に「深沢敏明」と署名をして、
備考欄に「永遠にプール冷えてます
！」と書いた。

△了▽

引用：

アーネスト・シヤクルトン

「南極探検乗組員募集」

(1914年・ロンドンタイムス)

岡田直也「プール冷えています」

(1986年・としまえん広告)

岡田直也「史上最低の遊園地」

(1991年・としまえん広告)